

ヨハネの手紙 第二ノート

2023 版

Dr. Thomas L. Constable

紹介

著者

著者は自らを「長老」と認めました(1節)。初期の教父たちの著作では、この手紙の著者は使徒ヨハネであるとされています。初期キリスト教徒は一般に彼を長老として認識していました^[1]。使徒は長老よりも高い権威のある職であったため、ヨハネが自分自身を使徒であることを説明したのではないかと考える人もいるかもしれません。実際にヨハネも自身を使徒であると認識していました。しかし、ヨハネの使徒職は、パウロの使徒職のように、挑戦を受け入れる余地はありませんでした。初期のキリスト教徒がパウロと同じようにヨハネの使徒職に疑問を抱いたという証拠はありません。長老というのはより愛情を込めた称号であり、公式ではないにしても少なくとも非公式に、教会におけるヨハネの役割を間違いなく表していました。おそらくこの時も老人だったのでしょう。

元の受信者

この手紙の受取人の身元が疑問視されています。一部の学者は、ヨハネが特定の女性とその子どもたちに手紙を書いたと結論付けています(1節)。^[2]これらの通訳者の中には、彼女の名前がエクレクタ(選ばれたという意味のギリシャ語エクレクテ、1節から)であると信じている人もいます。しかし、ヨハネが13節でこの女性の姉妹をエクレクテと呼んでいることから、これはありそうもないように思えます。ヨハネが特定の女性に宛てて手紙を書いたと信じている人もいますが、彼女の名前はキリア(マルタという名前のギリシャ語形で、愛人または淑女と訳されます。5節)ではないかと示唆しています。1節)。^[3]しかし、これも、ヨハネが6節、8節、10節、12節で使用した複数形の呼びかけを考慮すると、ありそうもないように思えます。より可能性の高い説明は、ヨハネが特定の地方教会を女性として擬人化し、その教会のクリスチャンたちを彼女の子どもたちとして擬人化したということです(参照:ペテロ第一5:13)。^[4]この見方は、キリストの花嫁としての教会の擬人化と調和しています(エペソ5:22-23; II コリント 11:2; 黙示録 19:7)。^[5]

新約聖書には、ある教会から別の教会への挨拶の例が他にもいくつかあります(ローマ 16:16; I コリント 16:19-20; ピリピ 4:21)。ヨハネの宣教の舞台は小アジアのローマの属州であったため、これがその属州の教会である可能性は十分にあります。フィンドレーは、ペルガモンの教会が選ばれた女性であり(1節)、エペソの教会が彼女の選ばれた姉妹であると主張しました(13節)。^[6]

目付

ヨハネが言及した教会に存在する状況は、ヨハネ第一で言及した状況と非常によく似ています。したがって、執筆時期はヨハネ第一の時代、西暦 90 年から 95 年に非常に近かったと思われる。

執筆場所

エペソは、ヨハネが3通の手紙すべてを書いた場所である可能性が最も高いと思われます。^[7]

「したがって、第 2 ヨハネと第 3 ヨハネは、他の書籍の規定として、第 1 ヨハネにある種の設定と枠組みの役割をしています。」^[8]

特徴

「ヨハネが神の家族について書いている使徒であることを思い出してください。パウロは神の教会について書いており、ペテロは神の統治について書いています。」^[9]

ジャンル

「第一ヨハネとは異なり、第二ヨハネと第三ヨハネは個人的な手紙のカテゴリーに属しています。」^[10]

アドルフ・ダイスマンは手紙と書簡を区別しました。^[11] 彼は第一ヨハネを書簡(正式な文学作品)のカテゴリーに、第二ヨハネと第三ヨハネを手紙(非文学的通信)のカテゴリーに入れました。

「これらは使徒の毎日の通信から抜粋したメモです。」^[12]

概要

- I. 紹介 1-3節
- II. 真実の重要性 4-11節
 - A. 真実を実践する 4-6節
 - B. 真実を守る 7-11節
- III. 結論 12-13節

以下は、この本の優れた説明的な概要です。[\[13\]](#)

- I. 真実とは排他的なクリスチャンコミュニティを生み出す (1-3節)。
- II. 真実とは独特のクリスチャン倫理を必要とする (4-6節)。
- III. 真実とは命題的なクリスチャンの教義と関係がある (7節)。
- IV. 真実にはクリスチャンの絶え間ない警戒が必要 (8-11節)。

メッセージ

この手紙のメッセージを要約すると、次のようになります: 兄弟愛を維持するには、真理にとどまることが不可欠です。ヨハネがこの手紙の中で何を言ったかを明確にしてみましょう。

まず、啓示された真理はクリスチャンの基礎であると彼は書きました。ヨハネは、啓示された真理の重要性を次の5つの方法で強調しました。(1) 彼はその真理を自分の愛の基盤としていた (1節a)。(2) 彼はすべてのクリスチャンの愛を真理の基礎としていた (1節b)。(3) 彼はその真理をもとにこの手紙を書いた(2節)。(4) 彼はそれに基づいてクリスチャンの 3つの偉大な恵みを根拠とした (3 節)。そして (5) 彼は読者がこの真理を人生の基盤としていることに賞賛した (4 節)。

真実とは、ヨハネがキリストの教えを意味したのです(9節)。これには、イエスが神の啓示として承認したすべてのもの(ヘブル語聖書、旧約聖書)、およびイエスが昇天後に個人的に、また使徒たちを通して教えたすべてのものが含まれます(新約聖書、使徒言行録1:1参照)。

私たちは神の真理の重要性のバランスを保たなければなりません。それは神や他の人々との適切な関係を適切にサポートする唯一の基盤です。それは神の戒めについての私たちの知識の源です。したがって、それは私たちと神や他の人々との関係の基礎となります(8節)。また一方、それは神や他の人々との適切な関係の基礎にすぎません。私たちはその真実に留まらなければなりません。留まることは、正統性に対する知識的に同意をするだけでなく、神が私たちを支配するという重要な関係も含まれます。神の真理(1ヨハネ1:7)の光の中を歩むことによって、この関係が可能になります。

第二に、ヨハネは、他者への愛は真理に留まることから生まれると書きました。彼は、他の人への愛がクリスチャンにとって非常に重要であると考えていました。彼の視点はモーセの律法とイエス・キリストの教えと調和しています(5節)。彼はまた、他者への愛は本質的に神のご意志への従順であるとみなしました(6節)。神に従うとき、私たちは他の人にとって最善のを行います。これが他者を愛するということです。私たちが真実に留まるときに、私たちは愛することができるのです

第三に、ヨハネは愛を真実から切り離すことに対して警告しました。ヨハネの時代には、真理を拒否しながらも愛を持ち続けようとする人もいました。彼らは初歩的な真理から高度な真

理に進歩したと主張しましたが、実際には彼らは真理を放棄していました(7-9節)。ヨハネは読者に、偽教師たちを決して励まさないようにと助言しました(10-11節)。しかし愛を差し控えるように言っているわけではありません。

現代でも同じような訴えをする人たちがいます。私たちは、聖書から逸脱した教えに従おうとする訴えに注意する必要があります。聖書が明らかにしているものよりも霊的真理についてより高度な知識を主張する訴え(カルトの訴えなど)に注意しましょう。私たちはこの手紙から、偽教師とどのように関わるべきかを学ぶことができます。偽教師の行う仕事を奨励すべきではありませんが、愛をもって彼らに手を差し伸べるべきです。ある講演者が「お互いが愛しあっている限り、個々が信じているものはそれほど問題ではない」と言うのを聞いたことがあります。ヨハネはこれに同意しなかったでしょう。ヨハネは、私たちが何を信じるかが非常に重要であると書きました。なぜなら、私たちが本当に愛し合っているかどうかは、何を信じるかによって決まるからです。真理にとどまることは、兄弟愛を維持するために不可欠です。これがこの短い手紙の本質的なメッセージです。

他のクリスチャンを一貫して愛したいなら、真理に留まり、キリストのうちに留まるとき、それが最も簡単であることがわかります。未信者や不信者は他の人を愛することができますし、実際に愛していますが、キリストに従う人を愛することは困難です。彼らは私たちとの共通点が少なく、私たちに有罪判決を受けていると感じることがよくあります。[\[14\]](#)

これらの強調を考慮すると、ヨハネ第二書がヨハネ第三書とともに「ヨハネの牧会書簡」と呼ばれているのも不思議ではありません。[\[15\]](#)

説明

I. 紹介 1-3節

ヨハネは自己紹介し、この手紙の受信者を特定し、挨拶し、読者が今後の内容に備えられるように、関心のある主な主題について言及しました。

1-2節 これらのメモの導入部分で説明されているように、長老は明らかに使徒ヨハネであり、選ばれた女性はおそらく地元の教会、彼女の子どもたちとはおそらくその教会の信者を指していたと言えるでしょう。[\[16\]](#)

「ここでは、長老という言葉が新約聖書のキリスト教の文脈で通常持つ意味での長老、つまり地方の教会で長老の役職を解職した人のことを意味していると考えerことは難しいと言えます。…この言葉は別の特殊な意味で現れています。2世紀のキリスト教文献において、使徒以降の世代の教会指導者、特に使徒または『使徒の人々』の弟子であ

り、したがって使徒から受け取り、自分たちの従者たちに代々伝えてきた『伝統』の保証人であった人々のことを指します」[\[17\]](#)

「住所が意図的に特定できないようにされている可能性は十分にあります。この手紙は、迫害が現実になり得る時期に書かれたものです。もし手紙が悪者の手に渡れば、問題が起こる可能性は十分にあります。手紙は、内部関係者にとっては宛先が非常に明確であるように宛先が定められていますが、部外者にとっては友人から友人への個人的な手紙のように見えます。そして、もしそうなら、手紙の宛先が誰であるか、あるいは誰であるかを特定するのが私たちが困難であるのは、ヨハネの才能に敬意を表する以外の何ものでもありません。」

[\[18\]](#)

教会は、えり抜かれた(選ばれた)人々、つまりクリスチャンで構成されるという点で選ばれました。

ヨハネはこの教会を愛していましたし、この教会のことを知っている他のクリスチャンも同様でした。この愛の基礎は、そこにいるクリスチャンたちが互いに信じている真理でした。ヨハネが彼らを愛した理由の一つは、彼らが真理を愛していたからです。[\[19\]](#) この真理は聖書における神の啓示を指しています。この真理の重要性は、ヨハネがこれら2節の中で3回言及していることから明らかです。

「真理は真実の愛を可能にします。」[\[20\]](#)

3節 ヨハネは、神の真理を守り(助け守り、保ち)、お互いに愛を実践することの重要性を読者に理解してもらいたかったのです。これら2つのことは、恵み、憐れみ、平和の基礎です(エペソ 2:4-5 参照)。恵みは神の過分の恩恵であり、憐れみは慈悲であり、平和は調和と内なる静けさです。

「『恵み、慈悲、平和』の継承は、神の最初の概念から人間の最終的な満足に至るまでの秩序を示しています。」[\[21\]](#)

これらの特質は、真実と愛が優勢な場所で開花します。

「真実から離れてしまえば、愛は単なる感傷や人道主義にすぎません。もし私が本当に兄弟たちのことを思っているなら、彼らに神の真実を知ってもらい、それに従って生きてもらいたいと思うでしょう。」[\[22\]](#)

「『真理と愛』が調和して共存するところでは、私たちはバランスのとれたクリスチャンの性格を持つことができます(エペソ4:15参照)。」[\[23\]](#)

イエス・キリストを父の子として描写したヨハネの記述から、最初の書簡と福音書の両方でイエスの完全な神性を強調したことを思い出することができます。

「これは、神の御子が救いの神聖な祝福をもたらす担い手、仲介者として世に遣わされたことを意味します。」[\[24\]](#)

II. 真実の重要性 4-11節

「ヨハネ第二の中央部分[4-11節]には、真理と誤り、愛と憎しみ、教会と世の間の大きな対比が簡潔にまとめられています。これらはヨハネ第一でより詳しく扱われています。」[\[25\]](#)

A. 真理を实践する 4-6節

ヨハネがこの手紙を書いたのは、神の啓示の真理に積極的に応答し神に従い続けるように読者に促すためでした。彼はまた、この真実を歪めようとする偽教師の侵入に抵抗するよう望んでいました。彼は4節から6節で最初の目的を取り上げました。

4節 ヨハネはまず教会を褒めました。彼は、神の真理に従って歩いている(すなわち、光の中を歩いている、ヨハネ第一1:7参照)会員の何人かに会うことができ、大いに喜びました。

「若い旅人には、自分たちの宗教を持ち運ぶことを教えましょう。宗教を家に置いたままにしたり、旅行先の国の悪い風習を学んだりしないようにしましょう。」[\[26\]](#)

「真理を实践するよりも、真理を研究すること、あるいは真理について議論することのほうがはるかに簡単です。」[\[27\]](#)

「…真実は、外部の支柱によって支えられるのではなく、それ自身が支えとして機能するとき、すべての疑いを払拭されます。」[\[28\]](#)

「ヨハネの目標は、信者たちを真理、つまりイエス・キリストの戒め、つまり他のクリスチャンを愛しなさいという戒めに従って歩む弟子に変えることでした(5-6節、マタイ22:37-39参照)。」[\[29\]](#)

5節 この教会に対するヨハネのメッセージは、新しい啓示(戒め)ではありませんでした。それは、互いに愛し続けることによって神の真理に従って歩み続けることを思い出させるものでした(ヨハネ第一 2:3-9、3:14-18、23、4:7、11、20-21 参照)。偽教師は読者に真実から離れるように勧めていたので、これは覚えておくべき重要なことです(6節)。

「愛が真実や信仰に先立つということではありません。愛は自身の告白が真実なものであるか、そして神の命令に対し誠実であるかを最も明確にテストすることができるのです。信仰は偽り、口先だけで告白することもできますが、愛はそれを行うのが偽りよりも難しいのです」[\[30\]](#)

6節 互いに愛し合うことの意味について質問がある人がいたら、ヨハネは、それは本質的に神に従うことだと説明しました(第一ヨハネ5:2-3a参照)。つまり、私たちが最もお互いを愛するのは、神の御言葉が明らかにする神の御心に従うとき(「神の戒めに従って歩む」とき)です。

「愛は、神の御心の表現をひとつひとつより詳しく理解しようと努めます。」[\[31\]](#)

この節の最後の単語「それ」の先行詞は、英語本文でもギリシャ語本文でも明らかになっていません。「それ」は愛または戒めのいずれかを指す可能性があります。ヨハネの議論を考慮すると、後者の選択肢のほうがやや可能性が高いように思えます。この場合、ヨハネが言いたいのは、使徒たちの説教の初めから神の命令を聞いていたように、読者も神の命令に従うべきだということでした(第一ヨハネ1:1参照)。彼らは偽教師たちが宣べ伝えていた偽福音に従うべきではありません。

神の具体的な戒めはすべて、実際にはクリスチャンにとっての1つの戒めまたは義務です(1ヨハネ 3:22-23 参照)。

B. 真実を守る 7-11節

ヨハネは 2 番目の目的に移りました。彼は、真実を歪め、一部の信者を欺いている偽教師たちに抵抗するよう読者を奨励するために書きました。

「長老の注意は、ヨハネ共同体内に大きな喜びを与えてくれる真の信仰の存在(4節)から、『この世に亡命した』欺瞞者による誤った信仰の支持によってもたらされる危険へと移ります。以前、著者はキリスト教の真理と愛について話しました。ヨハネ第二の残りの部分では、間違いとは対照的に真理の必要性に必然的に重点が置かれています。しかし、この2つの部分は連動しています。真理から逸れることは愛の失敗をもたらします。このように、異端の脱退とその結果に関する暗い描写(7-11節)が、愛と一致を求めるヨハネの温かい訴え(4-6節)の基礎となっています。」[\[32\]](#)

7節 この聖句は6節の勧めの理由とこの手紙の理由を示しており、その後の4節から6節とつながっています。

「…放浪の預言者と説教者は確かに問題を引き起こしました。彼らの立場は、とりわけ濫用されやすいものでした。彼らは絶大な名声を

持っていました。そして、最も望ましくない人々が、人生のあらゆる場面に介入し、地元の会衆を犠牲にして非常に快適な生活を送っていました。賢い悪党は巡回預言者として非常に快適な生活を送ることまでできたのです。異教の風刺家でさえこれを目の当たりにしました。ギリシャの作家ルキアヌスは、彼の作品「ペレグリヌス」で、働くことなく生計を立てる最も簡単な方法を見つけた男の姿を描きました。彼はキリスト教徒のさまざまなコミュニティを巡り歩き、彼の好むところに定住することで肥えた土地を生きた遍歴の山師であり、彼はそのコミュニティの費用を使って贅沢に暮らしていました。[\[33\]](#)

初期の教会ではすでに誤った教えが蔓延し始めていました(例:グノーシス主義、教義主義、ケリントス主義[\[34\]](#) など。ヨハネ第一2:18、22-23、27;4:1-3参照)。よくある間違いはキリスト論的なものでした。偽教師たちはイエスを、肉となって来た神の油そそがれた者(キリスト)とは別のものとみなしていました(第一ヨハネ5:1参照)。肉において来るということは、肉において来て、それを続けていくことを意味します。これが受肉の本当の見方です。イエスは完全に神であり、完全に人間であり、そしてこれからもその事実は変わることがありません。

「キリストは決して受肉するとは言われておらず、肉体となって現れたと言われています。前者であれば、神は誕生後しばらくしてイエスと一体になったと言える余地が残されているでしょう。」[\[35\]](#)

「受肉は単なる出来事以上のものであり、ロゴスと人間の本性との間の一時的かつ部分的なつながり以上のものでした。それは交わりの可能性の永続的な保証であり、それがもたらされる主要な手段でした。」[\[36\]](#)

このタイプの偽教師は、キリストに敵対するだけでなく(反キリスト)、欺瞞者でもあります。ヨハネは、そのような人が終末の反キリストであるという意味ではありませんでした。ギリシャ語の定冠詞の使用は、the と訳され、ここでのように無名の個人に対して使用されますが、英語の不定冠詞 a または anの方がより適切に翻訳できる場合があります。終末の反キリストがまだ現れていないことを示している他の聖句を考慮すると、この声明のこの理解はここでは好ましいと言えるでしょう(例えば、ダニエル11章、テサロニケ第二2章、ヨハネ第一2:18)。

「長老は、私たちが極度の悪人を『まさに悪魔である』と呼ぶように、真理を否定する人は誰であれ、まさに反キリストであると言っています。」[\[37\]](#)

8節 偽教師と妥協することによって報酬を失う可能性があります（ヘブル人への手紙の警告箇所を参照）。[\[38\]](#)さらに、ヨハネの読者にとっての損失は、ヨハネも読者の人生に関わっていたので、したがって彼も損失を伴うこととなります。

「読者は、全ての報酬を受けるために、使徒や伝道者たちがなされた働きを欺瞞者たちによって取り消されないように注意するよう警告されています。」[\[39\]](#)

「私たちが取り組んできたものとは、おそらく、手紙の受信者たちが自分たちの地域社会や周囲の地域社会で取り組んだ牧会的、宣教的な努力のことを指していると言えます。偽った教えを持つ反対派が反対されずに改宗することが許されれば、この活動は「失われる」でしょう。」[\[40\]](#)

いくつかの古代の写本（およびNIV）には、「自分が働いてきたものを失うな」と書かれています。[\[41\]](#)これは、読者が行った善行を指しており、それはキリストの裁きの座で報われるのです。ただし、損失は部分的なものにすぎません。彼らはそれでもある程度の報酬を受け取ることはなるでしょう（第一コリント3:11-15; 第一ペテロ 1:3-5 参照）。[\[42\]](#)

ヨハネが言いたかったことは、忠実であり続けるならば手紙の受信者や使徒たちは、真理を広めるために行ってきた今までの働きに相当する主からの報いを失うことはないことを覚えておくべきだということだったと私は思います。

救いの喪失は全く考えられていません。救いは神の賜物であり、行われた善行に対する報酬ではありません。

「ヨハネは彼らが最後までついてきてくれるかを心配しています。」[\[43\]](#)

「いつか『よくやった、良い忠実な僕だ』という種の言葉を聞くことができるように信者すべて、報いのために働くべきです（マタイ 25:21 参照 [2 テモテ4:7-8参照]）。」[\[44\]](#)

「偽りの教義が教会に侵入することを許されれば、その教会の進歩を止めたり、また教会を破壊したりする可能性さえあります。」[\[45\]](#)

9節 ここでヨハネが心に描いていた人物像は、偽教師らによると、真理をすべて持っていないために、偽教師からさらに教えられる必要があるクリスチャンの姿だったようです。偽教師が、自分たちの考えに同意しない人はまだ知識的に幼児である、あるいは少なくとも教育を受けていない、と主張するのは今日でもよくあることです。しかし、ヨハネは、その「未熟」と思われる

立場こそがクリスチャンにふさわしいものであるとみなしました(マタイ10:16参照)。彼の読者がそれを超えて進んでしまうと(「行き過ぎた人」、彼らは本当に真理から外れて失態に陥ってしまいます。ヨハネはここで読者に、背教、つまり真理を捨てて誤りを受け入れる危険性について警告しました(第一ヨハネ2:23-24参照)。

「科学が自然における神の啓示に対するものであるように、神学は恵みにおける神の啓示です。科学が常に第一の創造の驚異を次々に発見しているように、神学も常に新しい創造の栄光にさらに深く入り込み、キリストのうちに隠された宝を明らかにしていきます。聖ヨハネは神学の進歩を否定していません;彼はその限界について定義しています:『キリストの教えに留まりなさい』」。[\[46\]](#)

「transgresseth(「行き過ぎ」)という言葉は非常に興味深い言葉です。ギリシャ語ではproagoです。Agoは「行く」という意味で、proは「前」を意味します。プロアゴとは「前に行く、前に行く」という意味です。したがって、ここでの意味は、違反するというよりも、正しいことを超えて進むということです。」[\[47\]](#)

「根本的な真理を否定する進歩は後退である。」[\[48\]](#)

ヨハネが「留まる」(または保つ、ギリシャ語*meno*)という言葉を使ったことの背景には、彼が単なる死んだ教義の正統性ではなく、真理の固守に伴う神との重要な個人的関係について語ったことを示しています(ヨハネ8:31; 14:21-23; 15:1-7参照)。

ここでいうキリストの教えとは、「キリスト教の教えの基準」[\[49\]](#) であるキリストが与えた教え(主観的属格)のこともあれば、キリストについての教え(客観的属格)のことも考えられます。おそらくヨハネは両方のことを意味していたのでしよう。

「この教えの範囲内に留まらない者は『神を持っていません』。これは神との交わりに相当するものであり、これは私たちがすでに第一ヨハネ2:23で出会った考え方です(5:12参照。続きを参照)。」[\[50\]](#)

「イエス・キリストについての真の教義に留まらない人は、その新しい視点やライフスタイルにおいて神がともにいないと言うことです。そのような人は神の届く範囲から離れています、逆にキリストの教義に留まっている人は神とのより強いつながりをもっています。」[\[51\]](#)

10-11節 ヨハネの時代の文化では、哲学者や教師は宿泊先や経済的援助をしてくれる人々に頼っていました(例、使徒 18:2-3; 21:7)。^[52] ヨハネは読者に、このような方法で偽教師たちを助けることを拒否するよう指示しました(「彼を家に受け入れてはいけません」)。これ以上に、彼らはこれら偽教師たちを口頭で励ますことさえも許されませんでした(使徒15:24; 23:2-6; 1コリント10:20; 1テモテ5:22; ヤコブ 1:21; 1ペテロ3:13参照)。^[53] ヨハネはここで異端者の迫害を主張していませんが、読者に対し、彼らの破壊的な宣教に援助や励ましを与えないよう強く忠告しました。^[54]

「これは厳しい措置であり、特に新約聖書(特に第三ヨハネでも)ではもてなしが一般的に禁じられていることを思い出せばなおさらです。」^[55]

「この命令は、聖ヨハネの激しく熱心な精神に与えられたものであり、真のキリスト教の愛の精神はそうではないことを私たちに教えていると言う人もいます。しかし、正しく解釈すると、そうではないことがわかります。また、このように主の使徒たちに対する直接の倫理的命令を脇に置く自由があるというわけではないこともわかります。個人のさまざまな性格が彼らの著作の表面に表れているかもしれませんが、深層から湧き出てくるこれらの厳粛な命令において、私たちは彼ら全員を一つの体としてまとめたその真理の御霊の力を認識する必要があります。もしこの命令がどの時代においても教会の忠実な息子たちによって守られていれば、今の教会は限りなく良くなったことでしょう。」^[56]

「ユダヤ人の目には、挨拶は単なる形式的なもの以上のものです。平和の挨拶は祝福に相当します(マタイ10:13＝ルカ10:6参照)。それに比べて、ギリシャの挨拶(チャイレイン)は無色です。だからこそ著者は、ギリシャの読者に禁止の理由を説明する義務があると感じているのです。」^[57]

私は、ヨハネなら、偽教師を内密に正し、キリストの人柄と働きに対する真の認識に導く読者の努力を認めたと信じています(使徒言行録18・26参照)。私たち自身もそのような人々と接するとき、ある面では彼らの奉仕に関わり、また別の面では自分自身に関わる必要があります。私たちは彼らの働きを承認したり奨励したりしてはなりません、彼らとキリストとの個人的な関係に関心を示すべきです。^[58]

「今日、ヨハネの言葉を不慈悲なものとして反動させる表面的な感傷主義的な考え方が存在します。しかし、私たちは病気に対して不寛容であると医師を非難するのでしょうか？患者に尋ねてみてください。私たちの中に、致命的なウイルスを故意に自分の体内に受け入れる人

がいるでしょうか？私たちは皆、異なる見解や信念を持つ人々と交わらなくてはなりませんし、キリスト教徒として私たちは真に彼らの魂を愛すべきですが、いかなる種類のキリストを辱めるプロパガンダでも彼らと協力的に交わることは、私たちを買い取ってくださった主への愛への裏切り行為です^[59]

「確かに、誰に対してもこのような過激なもてなしを差し控える前に、細心の注意を払うべきです。長老の場合、それは共同体の信仰を破壊することに専念した反キリスト教徒にのみ適用されました。この問題には、解釈の相違や個人的な誤解以上のものが含まれていました。それは過激かつ明確に定義された不信仰であり、キリスト教の中心を揺るがす真理と実践の倒錯を積極的かつ攻撃的に推進するものでした。」^[60]

「親の責任は、これに例えられるかもしれません。親は、たとえ親戚と一緒にいる時でもそのなかで誰を家で楽しませるか考慮しなければなりません。親戚の中には、子どもの道徳的、精神的、身体的な安全性を脅かすような疑わしい性格の人もいるかもしれません。そのような親族は除外されなければなりません。親は親族への配慮と子どもたちへの責任のバランスをとらなければいけません。ヨハネは、この箇所である選ばれた女性とその子どもたちが偽教師たちに憎しみをもって対処したり報復したりすることを示しているのではなく、彼らの異端的な考えが若い教会を破壊することがないように、偽教師たちから距離を置くべきであるとアドバイスしています。」^[61]

III. 結論 12-13節

ヨハネは、この手紙が簡潔である理由を説明するために、読者を直接訪問したいという希望を表明しました。

12節 ヨハネはこの書簡に書かれている内容の他にももっと書くべき議題はあったけれども神からそれを手紙に記すように示されなかったとこの箇所と言及しています。彼は、この手紙を標準サイズのパピルス紙に書き記すことができたかもしれません。ヨハネが手紙の読者を訪問したいという願いを実際に叶えることができたかはわかっていません。

「一般原則を定めるのは簡単なことですが、それを特定の条件に適用するのは際どい作業であり、それには知識、同情、慈善が必要です。」^[63]

彼が読者を訪問したとき、読者は喜びに満ちたことでしょう(第一ヨハネ1:4参照)。

13節 ヨハネは間違いなく、彼自身が会員である姉妹教会のクリスチャンが自分の挨拶とともに読者に挨拶を送ってくれることを意味していたと思われます。

Bibliography

- Alford, Henry. *The Greek Testament*. 4 vols. New ed. Cambridge: Deighton, Bell, and Co., 1883, 1881, 1880, 1884.
- Bailey, Mark L., and Thomas L. Constable. *The New Testament Explorer*. Nashville: Word Publishing Co., 1999. Reissued as *Nelson's New Testament Survey*. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1999.
- Barclay, William. *The Letters of John and Jude*. The Daily Study Bible series. 2nd ed. Edinburgh: Saint Andrew Press, 1962.
- Barker, Glenn W. "2 John." In *Hebrews-Revelation*. Vol. 12 of *The Expositor's Bible Commentary*. 12 vols. Edited by Frank E. Gaebelein and J. D. Douglas. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1981.
- Baxter, J. Sidlow. *Explore the Book*. 1960. One vol. ed. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1980.
- Blaiklock, E. M. *Today's Handbook of Bible Characters*. Minneapolis: Bethany House Publishers, 1979.
- Blair, J. Allen. *The Epistles of John: Devotional Studies on Living Confidently*. Neptune, N.J.: Loizeaux Brothers, 1982.
- Brooke, A. E. *A Critical and Exegetical Commentary on the Johannine Epistles*. International Critical Commentary series. Edinburgh: T. & T. Clark, 1912.
- Bruce, F. F. *The Epistles of John*. London: Pickering & Inglis Ltd., 1970; reprint ed., Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1986.
- Calvin, John. *Institutes of the Christian Religion*. The Library of Christian Classics series, volumes 20 and 21. Edited by John T. McNeill. Translated by Ford Lewis Battles. Philadelphia: Westminster Press, 1960.
- Carson, Donald A., and Douglas J. Moo. *An Introduction to the New Testament*. 2nd ed. Grand Rapids: Zondervan, 2005.
- Darby, John Nelson. *Synopsis of the Books of the Bible*. 5 vols. Revised ed. New York: Loizeaux Brothers Publishers, 1942.

Deissmann, Adolf. *Light from the Ancient East*. 4th ed. Translated by Lionel R. M. Strachen. Grand Rapids: Baker Book House, 1965.

Dodd, C. H. *The Johannine Epistles*. The Moffatt New Testament Commentary series. New York: Harper and Row, 1946.

The Ecclesiastical History of Eusebius Pamphilus. Twin Brooks series. Popular ed. Grand Rapids: Baker Book House, 1974.

Ehrman, Bart D. *A Brief Introduction to the New Testament*. New York and Oxford, U.K.: Oxford University Press, 2004.

_____. *The New Testament: A Historical Introduction to the Early Christian Writings*. 3rd ed. New York and Oxford, U.K.: Oxford University Press, 2000, 2004.

Findlay, George G. *Fellowship in the Life Eternal*. London: Hodder and Stoughton, 1909.

Funk, Robert W. "The Form and Structure of II and III John." *Journal of Biblical Literature* 86 (1967):424-30.

Gaebelein, Arno C. *The Annotated Bible*. 4 vols. Reprint ed. Chicago: Moody Press, and New York: Loizeaux Brothers, 1970.

Graystone, Kenneth. *The Johannine Epistles*. New Century Bible Commentary series. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., and London: Marshall, Morgan & Scott, 1984.

A Greek-English Lexicon of the New Testament. By C. G. Wilke. Revised by C. L. Wilibald Grimm. Translated, revised and enlarged by Joseph Henry Thayer, 1889.

Guthrie, Donald. *New Testament Introduction: Hebrews to Revelation*. 2nd ed. reprinted. London: Tyndale Press, 1962, 1966.

Hanna, Kenneth G. *From Gospels to Glory: Exploring the New Testament*. Bloomington, Ind.: CrossBooks, 2014.

Harris, W. Hall. "A Theology of John's Writings." In *A Biblical Theology of the New Testament*, pp. 167-242. Edited by Roy B. Zuck. Chicago: Moody Press, 1994.

Henry, Matthew. *Commentary on the Whole Bible*. One volume ed. Edited by Leslie F. Church. Grand Rapids: Zondervan Publishing Co., 1961.

Hodges, Zane C. "2 John." In *The Bible Knowledge Commentary: New Testament*, pp. 905–9. Edited by John F. Walvoord and Roy B. Zuck. Wheaton: Scripture Press Publications, Victor Books, 1983.

_____. *The Epistles of John: Walking in the Light of God's Love*. Irving, Tex.: Grace Evangelical Society, 1999.

_____. "The Second Epistle of John." In *The Grace New Testament Commentary*, 2:1231–33. Edited by Robert N. Wilkin. 2 vols. Denton, Tex.: Grace Evangelical Society, 2010.

The Holy Bible: New International Version. Colorado Springs, et al.: International Bible Society, 1984.

Irenaeus. *Against Heresies*. In *The Ante-Nicene Fathers*. Vol. 1: *The Apostolic Fathers with Justin Martyr and Irenaeus*. Edited by Alexander Roberts and James Donaldson. American reprint of the Edinburgh edition. New York: Charles Scribner's Sons, 1899.

Ironside, Harry A. *The Continual Burnt Offering: Daily Meditations on the Word of God*. 2nd ed. New York: Loizeaux Brothers, Bible Truth Depot, 1943.

Jamieson, Robert; A. R. Fausset; and David Brown. *Commentary Practical and Explanatory on the Whole Bible*. Reprint ed. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1961.

Kruse, Colin G. *The Letters of John*. The Pillar New Testament Commentary series. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., and Leicester, Eng.: Apollos, 2000.

Ladd, George Eldon. *A Theology of the New Testament*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1974, 1979.

Lange, John Peter, ed. *Commentary on the Holy Scripture*. 12 vols. Reprint ed. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1960. Vol 12: *James–Revelation*, by J. P. Lange, J. J. Van Oosterzee, G. T. C. Fronmuller, and Karl Braune. Enlarged and edited by E. R. Craven. Translated by J. Isidor Mombert and Evelina Moore.

Lenski, Richard C. H. *The Interpretation of the Epistles of St. Peter, St. John and St. Jude*. 1945. Reprint ed. Minneapolis: Augsburg Publishing House, 1961.

Marshall, I. Howard. *The Epistles of John*. New International Commentary on the New Testament series. Reprint ed. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1984.

McGee, J. Vernon. *Thru the Bible with J. Vernon McGee*. 5 vols. Pasadena, Calif.: Thru The Bible Radio; and Nashville: Thomas Nelson, Inc., 1983.

McNeile, Alan Hugh. *An Introduction to the Study of the New Testament*. 2nd ed. revised by C. S. C. Williams. Oxford: Clarendon Press, 1927, 1953.

Mitchell, John G. *Fellowship: Three Letters from John*. Portland: Multnomah Press, 1974.

Morgan, G. Campbell. *An Exposition of the Whole Bible*. Westwood, N.J.: Fleming H. Revell, 1959.

_____. *Living Messages of the Books of the Bible*. 2 vols. New York: Fleming H. Revell Co., 1912.

The Nelson Study Bible. Edited by Earl D. Radmacher. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1997.

The NET2 (New English Translation) Bible. N.c.: Biblical Press Foundation, 2019.

The New American Standard Bible. La Habra, Cal.: The Lockman Foundation, 2020.

Pfeiffer, Robert H. *History of New Testament Times With an Introduction to the Apocrypha*. London: Adam and Charles Black, 1949, 1963.

Pond, Eugene. "2 John." In *Surveying Hebrews through Revelation*, pp. 105–110. 2nd ed. Edited by Paul D. Weaver. Learn the Word Bible Survey series. [Schroon Lake, N.Y.]: Learn the Word by Word of Life, 2019.

Richardson, Alan. *An Introduction to the Theology of the New Testament*. New York: Harper & Row, 1958.

Robertson, Archibald Thomas. *Word Pictures in the New Testament*. 6 vols. Nashville: Broadman Press, 1931.

Ryrie, Charles Caldwell. *Biblical Theology of the New Testament*. Chicago: Moody Press, 1959.

____. "The Second Epistle of John." In *The Wycliffe Bible Commentary*, pp. 1479–81. Edited by Charles F. Pfeiffer and Everett F. Harrison. Chicago: Moody Press, 1962.

Schnackenburg, Rudolf. *The Johannine Epistles*. Translated from the 7th ed. of *Die Johannesbriefe* (1984) by Reginald and Ilse Fuller. New York: Crossroad Publishing Co., 1992.

Smalley, Stephen S. *1, 2, 3 John*. Word Biblical Commentary series. Waco: Word Books, 1984.

Smith, David. "The Epistles of St. John." In *The Expositor's Greek Testament*, 5 (1910):151–208. 4th ed. Edited by W. Robertson Nicoll. 5 vols. London: Hodder and Stoughton, 1900–12.

Stott, John R. W. *Basic Introduction to the New Testament*. 1st American ed. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1964.

____. *The Epistle of John*. Tyndale New Testament Commentaries series. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1964.

Swindoll, Charles R. *The Swindoll Study Bible*. Carol Stream, Ill.: Tyndale House Publishers, 2017.

Tenney, Merrill C. *The New Testament: An Historical and Analytic Survey*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1953, 1957.

Thiessen, Henry Clarence. *Introduction to the New Testament*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1943, 1962.

Westcott, Brooke Foss. *The Epistles of St. John*. 1883. Reprint ed. England: Marcham Manor Press, 1966.

Wiersbe, Warren W. *The Bible Exposition Commentary*. 2 vols. Wheaton: Scripture Press Publications, Victor Books, 1989.

Wuest, Kenneth S. *Word Studies in the Greek New Testament*. Reprint ed. 16 vols. in 4. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1966.

Yarbrough, Robert W. *1–3 John*. Baker Exegetical Commentary on the New Testament series. Grand Rapids: Baker Academic, 2008.

-
- [1] See Richard C. H. Lenski, *The Interpretation of the Epistles of St. Peter, St. John and St. Jude*, p. 554.
- [2] E.g., Kenneth S. Wuest, *Word Studies in the Greek New Testament*, 4:4:199; Warren W. Wiersbe, *The Bible Exposition Commentary*, 2:534.
- [3] E.g., David Smith, "The Epistles of St. John," in *The Expositor's Greek Testament*, 5:162; E. M. Blaiklock, *Today's Handbook of Bible Characters*, p. 607.
- [4] Lenski, p. 555; Rudolf Schnachenburg, *The Johannine Epistles*, p. 278.
- [5] See William Barclay, *The Letters of John and Jude*, pp. 152–53, for discussion of these views.
- [6] G. G. Findlay, *Fellowship in the Life Eternal*, pp. 30–32.
- [7] Donald A. Carson and Douglas J. Moo, *An Introduction to the New Testament*, p. 675; Henry Alford, *The Greek Testament*, 4:1:188.
- [8] Findlay, p. 5.
- [9] J. Vernon McGee, "The Second Epistle of John," in *Thru the Bible with J. Vernon McGee*, 5:821.
- [10] I. Howard Marshall, *The Epistles of John*, p. 9.
- [11] See Adolph Deissmann, *Light from the Ancient East*, pp. 228–29.
- [12] Findlay, p. 4.
- [13] Roy Clements, Eden Baptist Church, Cambridge, England, July 19, 1992.
- [14] Adapted from G. Campbell Morgan, *Living Messages of the Books of the Bible*, 2:2:177–93.
- [15] Findlay, p. 6.
- [16] See Zane C. Hodges, "The Second Epistle of John," in *The Grace New Testament Commentary*, 2:1233; Colin G. Kruse, *The Letters of John*, p. 204. Quotations from the English Bible in these notes are from the *New American Standard Bible* (NASB), 2020 edition, unless otherwise indicated.
- [17] F. F. Bruce, *The Epistles of John*, p. 135. See Irenaeus (ca. A.D. 130–202), *Against Heresies*, 5.5.1; 5.36.2; *The Ecclesiastical History of Eusebius Pamphilus*, 3.39.
- [18] Barclay, p. 162.
- [19] Hodges, 2:1231.
- [20] B. F. Westcott, *The Epistles of St. John*, p. 225.
- [21] *Ibid.*
- [22] Zane C. Hodges, *The Epistles of John*, p. 255.
- [23] Bruce, p. 139.
- [24] Schnachenburg, p. 281.
- [25] Stephen S. Smalley, *1, 2, 3 John*, p. 322. Cf. John R. W. Stott, *The Epistles of John*, p. 205.
- [26] Matthew Henry, *Commentary on the Whole Bible*, p. 1963.
- [27] Wiersbe, 2:535.
- [28] John Calvin, *Institutes of the Christian Religion*, 1:8:1.
- [29] Hodges, "The Second . . .," 2:1231. Bold highlighting omitted.
- [30] Glenn W. Barker, "2 John," in *Hebrews–Revelation*, vol. 12 of *The Expositor's Bible Commentary*, p. 363.
- [31] Westcott, p. 228.
- [32] Smalley, p. 327.
- [33] Barclay, p. 156.
- [34] See Lenski, p. 566.
- [35] Charles C. Ryrie, "The Second Epistle of John," in *The Wycliffe Bible Commentary*, p. 1480.
- [36] A. E. Brooke, *A Critical and Exegetical Commentary on the Johannine Epistles*, p. 175.
- [37] Marshall, p. 71.
- [38] Barker, pp. 364–65; Marshall, p. 72.
- [39] Ryrie, p. 1480.

- [40] *The NET2 Bible* note on v. 8. *The NET2 Bible* refers to *The NET2 (New English Translation) Bible* (2019 ed.).
- [41] NIV refers to *The Holy Bible: New International Version*.
- [42] See Zane C. Hodges, "2 John," in *The Bible Knowledge Commentary: New Testament*, p. 907.
- [43] A. T. Robertson, *Word Pictures in the New Testament*, 6:253.
- [44] McGee, 5:832. See also H. A. Ironside, *The Continual Burnt Offering*, "devotional for Dec. 21.
- [45] Hodges, "The Second . . .," 2:1232.
- [46] David Smith, "The Epistles of St. John," in *The Expositor's Greek Testament*, 5:202-3.
- [47] McGee, 5:832.
- [48] G. Campbell Morgan, *An Exposition of the Whole Bible*, p. 530.
- [49] Robertson, 6:254.
- [50] Schnachenburg, p. 286.
- [51] Hodges, "The Second . . .," 2:1232.
- [52] See Kruse, pp. 215-16, for discussion of hospitality in the Mediterranean world.
- [53] Cf. Brooke, p. 179.
- [54] Robert W. Yarbrough, *1-3 John*, p. 351.
- [55] Ryrie, p. 1481. See Findlay, pp. 13-20, for discussion of hospitality in the early church.
- [56] Alford, 4:2:521.
- [57] Schnachenburg, p. 287.
- [58] See Hodges, "2 John," pp. 908-9.
- [59] J. Sidlow Baxter, *Explore the Book*, 6:331. See also Hodges, "The Second . . .," 2:1233.
- [60] Barker, pp. 365-66.
- [61] *Ibid.*, p. 366. Cf. Marshall, p. 75.
- [62] Smalley, p. 314.
- [63] Smith, 5:204